

バスで帰る女子大生

脚本・井上悠介

役者
女子大生・・・冬のモコモコの恰好。

設定は北海道札幌市周辺。

明転。薄暗め。下手側に女子大生。冬の外の夜。

電話に出る。

女子大生「あ、もしもし、お母さん？」

女子大生「うん。外だよ、バス停の前」

女子大生「そう、雪？ 降ってるよ。札幌だもん」

女子大生「前橋は？ 全然降ってないの？」

女子大生「へえ・・・そうなんだ」

女子大生「え？ 大学のゼミ室でレポート書いてた」

女子大生「だって家だと集中出来ないんだもん」

女子大生「楽しいよ。みんな仲良くて。今度ゼミの人だけで旅行に行くんだー」

女子大生「いや、ルスツルスツ」

女子大生「彼氏？ 彼氏なんかいないよー」

女子大生「うん。なんかね、そういう感じじゃないんだよね。バイトも忙しいし」

女子大生「え、カフェだよー。もう一年くらい経つよ」

女子大生「ノーパンしゃぶしゃぶじゃないよ。大丈夫、普通のカフェだよ」

女子大生「うん。あ、今電池あと三十パーセントくらいしかないんだよね」

女子大生「そう、うん・・・全っ然来ない。時間とっくに過ぎてるけど」

女子大生「そう、天気が悪い日は、バスで帰るんだよね、私」

女子大生「うん・・・うん・・・」

バス到着の効果音

女子大生「あ、やっときた。多分あのバスだと思う。家に着いたらまた、電話するね」

女子大生「うん。お母さんも、元気だね」

電話を切る。バス開く音で暗転。OP映像。

明転。舞台上にバス用の椅子が二つあり、窓側の席に座っている女子大生。寝ている。電話が鳴る。

起きる。乗り過ぎた感。怖がる？ 電話に出る。

女子大生「あ、窪塚さん。お疲れ様です」

女子大生「今暇っていうか、ほら、この前うちのゼミで課題出て、それを大学でやってたら、疲れてバスで寝ちゃって、乗り過ぎしちゃったみたいなんですよね・・・はい。で今電話の音で目が覚めて」

女子大生「まあ、運転手に聴こえなければ大丈夫だと思います・・・」

女子大生「・・・え、な、なんですか？」

女子大生「あ、押してないです。そ、それもそうですね、」

ボタンを押す。『次停まります』のようなバスのアナウンスが流れる。

女子大生「危うくずっとバスが止まらないところでした。で、なんですか・・・？」

女子大生「こんな時間って、今何時ですか」

腕時計を見る

女子大生「十一時つてもう二時間くらい乗ってるじゃないですか・・・」

女子大生「いや、多分大丈夫です・・・次止まったら速攻降りてタクシー拾って帰ります・・・」

財布を確認

女子大生「六千円くらいあれば足りそうですよね？」

女子大生「あ、まあそりゃわかんないですよね・・・」

女子大生「窪塚さんは乗り過ぎしたことあります？」

女子大生「バスです」

女子大生「あー、そうですね、いつもJRですもんね」

女子大生「え・・・小樽ですか・・・しかも終電で・・・」

女子大生「えー、朝までサンクスでビックコミックオリジナル読んでたんですか」

女子大生「それに比べたらまだましかもしれないですね・・・」

女子大生「小樽ですか？ 行ったことないですね、海綺麗ですよ」

女子大生「なんでそんなこと言うんですか、綺麗ですよ」

女子大生「え、連れてつてくれるんですか？ やったあ」

女子大生「あ、その時は本間ちゃんでも連れて行きましょう」

・・・

女子大生「ここどこなんですかね・・・」

女子大生「いや、何もないです。もう雪しかありません」

女子大生「あ、ビニールハウスがありました」

女子大生「あとは木ですね。木がぼつぼつとありますね」

女子大生「え、迎えに来てくれるんですか？ どこだか分かったんですか？」

女子大生「え！ 富良野なんですか？ なんでこれだけの情報で富良野だと思っただけか？」

女子大生「脅かさないでくださいよ、札幌で帰ろうとバス乗って、気が付いたら富良野だったら超怖いじゃないですか・・・」

女子大生「普通バスの運転手って寝てる人いたら起こしません？」

女子大生「なんでこんな暗いバス一人で乗ってなきゃいけないんですか、超怖いんですけど」

女子大生「てか起きないもんですかね？ 二時間も」

女子大生「・・・バスの前にある料金のやつあるじゃないですか？」

女子大生「いや、あるじゃないですか、整理券なし、とか書いてあってその下に料金書いてあるやつ」

女子大生「いや、ありますって。窪塚さんバス乗ったことないんですか？」

女子大生「いや、だから普通あるんですよ。そのところに料金が何も書いてないんです」

女子大生「そこが光ってないってことありますかね・・・」

女子大生「省エネなんですか？ そこを省にしないでくださいよ・・・」

女子大生「あ、え、あ、確かに。二時間バス乗っているとどれくらいの料金取られるんですかね・・・」

女子大生「六千円で帰れますかね・・・でも見た感じタクシーも無いし・・・」

女子大生「そうですね・・・結局場所も分からないんですよね・・・」

女子大生「ポケモンGO！ ポケモンGOで場所分らないですか！」

女子大生「そうですね！ ほら！ ポケストップで！ 一回電話切りますね！」

女子大生「アンインストールしなくて良かった・・・」

女子大生「うわ・・・なんもな・・・」

女子大生「主人公がすげえ速さで走ってる・・・」

女子大生「あ……ポケストップ……！」

女子大生「……仁木……果樹園？」

電話かける

女子大生「あ、窪塚さん……ポケストップありました！」

女子大生「仁木果樹園って書いてありました！ 仁木ってどこですか!？」

女子大生「……小樽の奥……え、余市よりも奥ですか……」

女子大生「ちなみにそれって、札幌から遠いですか……？」

女子大生「え……車で……二時間くらい……」

女子大生「次バスが止まったら降りますんで、車で迎えに来てくれませんか？」

女子大生「はい、この雪の中だったら朝になるまでに多分死ぬんで」

女子大生「タクシーなんて無理ですよ、全然車走ってないですもん」

女子大生「冬道怖いとかどうでもいいじゃないですか……私はもっと怖いです」

女子大生「本当お願いです……ほんと、一生のお願いです、車で仁木まで来てください……」

女子大生「(告られる)」

女子大生「え、なに、どういう意味ですか……？」

女子大生「それは、要するに付き合わなかったら迎えに来ないってことですよね？」

女子大生「……」

女子大生「頭沸いてんじゃないですか!？ だって私、今バスに仁木まで連れてこられるですよ！ 私はそんな状況なのに、なんでそんなこと言えるんですか？ 仁木ですよ!？」

女子大生「調子に乗らないでください！ そうやって隙あらばしばしば女抱いてるんじゃないですか!？」

女子大生「はあ!？ 童貞だとかそんなの訊いてねえよ！ この童貞が!」

女子大生「本当に私のこと好きなんだったら無償の愛で仁木まで車で迎えに来てくださいよ!」

女子大生「うるせえ！ 童貞！ 死ね!」

電話切る

女子大生「……」

女子大生「電池15パーセントしかない・・・」

運転手のところまで行く

女子大生「一人で騒いでてすみません・・・あの・・・次いつ止まるんですか・・・？」

・・・

女子大生「すみません！」

・・・

女子大生「実は、二時間くらい寝過ぎしちゃったみたいで・・・」

・・・

女子大生「なんで無視するんですか・・・？」

・・・

女子大生「なんで・・・仁木なんですか・・・？」

・・・

席に戻る

女子大生「怖い怖い怖い・・・」

電話かける

女子大生「もしもし、あの、おまわりさんですか？ あの・・・実は」

女子大生「はい、あの、バスが、止まらなくて・・・運転手さんにも無視されて・・・今仁木なんですよ。札幌から乗ったのですが・・・」

アナウンス「あー、すみません車内での携帯電話の使用はお断り願います」

女子大生「・・・喋ったああああ、怒られたああああ」

女子大生「・・・え、いや、ふざけてなんかしないですって」

女子大生「いや、有り得ないじゃなくて・・・だって現に私乗ってますし」

女子大生「バスのナンバー？ え、分からないですよ・・・だって私今乗ってるので・・・」

女子大生「え、会社？ 会社も分かんない、ほら、なんだったけ、あの、大学前の、環状どお・・・」

女子大生「いや、いたずらじゃないです・・・酔っ払ってもないです・・・本当です・・・

助けてください・・・」

女子大生「とりあえず、今仁木なんで・・・仁木まで来てください・・・仁木を走ってるバスな・・・切られた・・・」

・・・

女子大生「全然止まらない・・・」

運転席まで行く

女子大生「耳聴こえてるんじゃないですかあ・・・」

女子大生「なんですか・・・ お巡りさんにばれたらやましいことでもあるんですか・・・？」

・・・

女子大生「なんで返事してくれないんですか・・・」

・・・

女子大生「なんで私なんですかあー・・・」

・・・

席に戻る

女子大生「あと10パーセントだ・・・」

電話着信音

女子大生「あ、本間ちゃんだ・・・」

女子大生「あ、もしもし、本間ちゃん・・・私今バスがとま・・・え？」

女子大生「確かに・・・さつき・・・窪塚さんには・・・なんか言われたけど」

女子大生「いや、それはだって可哀想とかじゃなくて・・・だって今私バスに乗って仁木まで連れてこられてるんだよ」

女子大生「あ、仁木ってイチゴ狩りが盛んなんだ。だからさつきビニールハウスがあったんだね、知らないけど・・・」

女子大生「え、なに・・・私が悪いの・・・？」

女子大生「・・・知らねえよ窪塚さんの気持ちなんか！ だって私の方がよっぽど可哀想

でしょ！」

女子大生「何！？　じゃあ本間ちゃんはバスで仁木まで連れてこられたことあるの？　気が付いたら仁木にいる人の気持ち分かるの？」

女子大生「関係なくないよ！　ていうか私の頭は今仁木しかないよ！」

女子大生「はあ、なに？　今の本間ちゃんの目的は何なの？」

女子大生「え？　つまり本間ちゃんは窪塚さんのことが好きだったってこと？」

女子大生「じゃああきらめた方がいいよー。窪塚さんは私と付き合いたみたいだけど私と本間ちゃんはタイプが真逆だからきつと窪塚さんは本間ちゃんと付き合いたくないよ」

女子大生「てかもうそんなのどうでもいいよおおお！　私仁木なんですけど！」

女子大生「冷静になれる訳ないよ！　冗談は顔だけにして！」

女子大生「本間！　死ね！」

電話切る

女子大生「……」

女子大生「ゼミの人間関係が無茶苦茶だ……」

電話着信音

女子大生「また電話だ……うわ……」

落ち着いてから電話に出る

女子大生「あ、店長、お疲れ様です……」

女子大生「え、明日のシフトですか？」

女子大生「いや、シフトは入ってないのですが……」

女子大生「あ……ちよっと……」

女子大生「いや、用事も入ってないです」

女子大生「あの……今、バスがとまらなくて……仁木にいるんです……」

女子大生「はい、あの仁木です……」

女子大生「イチゴ狩りじゃないです……今冬ですし……」

女子大生「いや、だから旅行じゃないんでお土産もないです……で、バス止まる見込みが無くて……まだずっと走ってるんです……」

女子大生「違います本当なんですよ！　酔ってなんかいません！　夢でもないです」

女子大生「だからああ家に帰れたらバイトに行けますけどお、家に帰れなかったらバイトに行けないんですよ」

女子大生 「いや、シフトを代わりたい気持ちはあるんです」

女子大生 「でも帰れる気がしないんですよ！ バスが止まらないから！」

女子大生 「本当です！ 私的には代わりたいですよ！ もし代われるならこの後家に帰れるってことになりますし！ でも、店长的にはこの状況で私をシフトに入れるのはとてもリスクーだと思っうんですよ！」

女子大生 「そうですね、店的にもリスクーだと思います、現実問題行ける見込みがないです、いや、このまま降りれなかったらどうなるかのビジョンも見えないですけど！」

女子大生 「いや、酔ってないですって！」

電話切れる

女子大生 「もう来なくていいって言われた・・・」

女子大生 「・・・」

女子大生 「心なしかトイレ行きたくなってきた・・・」

女子大生 「・・・トイレ・・・ないよね・・・」

女子大生 「いや、別にまだ我慢は出来るけど・・・」

女子大生 「運転手さんトイレ・・・」

電話が鳴る

女子大生 「(舌打ち)」

電話に出る

女子大生 「窪塚さん何ですかあ！ 何の用ですか！」

女子大生 「はあ？ 本間ちゃんが泣いてるとか今心底どうでもいいです！」

女子大生 「何ですか！ それを言うために電話してきたんですか！？」

女子大生 「大体、付き合ってたかなんて言うんですかあ！」

女子大生 「私は私でゼミでの、当たり障りのないぬまぬました関係性に割と居心地の良さを感じていたんですよ？ なんてそういうことしてぶち壊すんですか？」

女子大生 「その微妙な点々々の矢印が飛び交うゼミの人達の関係性にみんな気付かないフ

リして過ごしてたんですよ・・・」

女子大生「・・・そんなことしたら・・・居心地悪くなくなっちゃうじゃないですかあ・・・」

女子大生「そうですね・・・もうこの話はしたくないです・・・」

女子大生「で、あの、今、私仁木にいるんですけど・・・」

女子大生「そうですね！ まだずっと乗ってるんです！ 帰れなかったらゼミの居心地とか別に関係ないです・・・」

女子大生「・・・車で迎えに来てほしいです・・・」

女子大生「(告られる)」

女子大生「・・・」

女子大生「・・・分かりましたもう、付き合います、付き合いますから、まずは車で迎えに来てください・・・はい、仁木です、仁木からもうちょっと進んじやってる気もしますけど・・・はい」

女子大生「だって、私が帰って来なかったら付き合っても意味無いじゃないですか・・・彼氏なら・・・助け出してくださいよ・・・」

女子大生「はい・・・もう・・・電池も無いんで・・・本当に・・・頑張ってください・・・」

女子大生「・・・はい、もう、なんでもいいです、ご自由に、下の名前ででも呼んでください」

女子大生「・・・はい・・・はい・・・待ってます・・・はい」

電話切る

女子大生「・・・彼氏が、出来ました」

女子大生「・・・」

女子大生「・・・4パーセント・・・」

ポケモンGOを起動する

女子大生「あった、ポケストップ・・・」

女子大生「倶知安・・・」

女子大生「仁木越えちゃった・・・窪塚さん、どこに迎えに来るつもりなんだろう・・・」

女子大生「馬鹿だなあ・・・」

女子大生「・・・いっそ、帰れない方がいいのかなあ」

女子大生「あー、でもトイレしたい・・・」

電話かかってくる。

女子大生「あ、もしもしお母さん、あのね、今私・・・」

女子大生「え？ ああ、モロヘイヤ、送ってくれたの・・・？」

女子大生「・・・そうだね、これからの季節、風邪ひきやすいもんね、モロヘイヤ食べて、風邪を予防しなきゃいけないもんね」

女子大生「・・・」

女子大生「お母さん、ありが・・・あ、電池切れた」

バスの環境音が大きくなる。ゆっくりと暗転。

終わり